

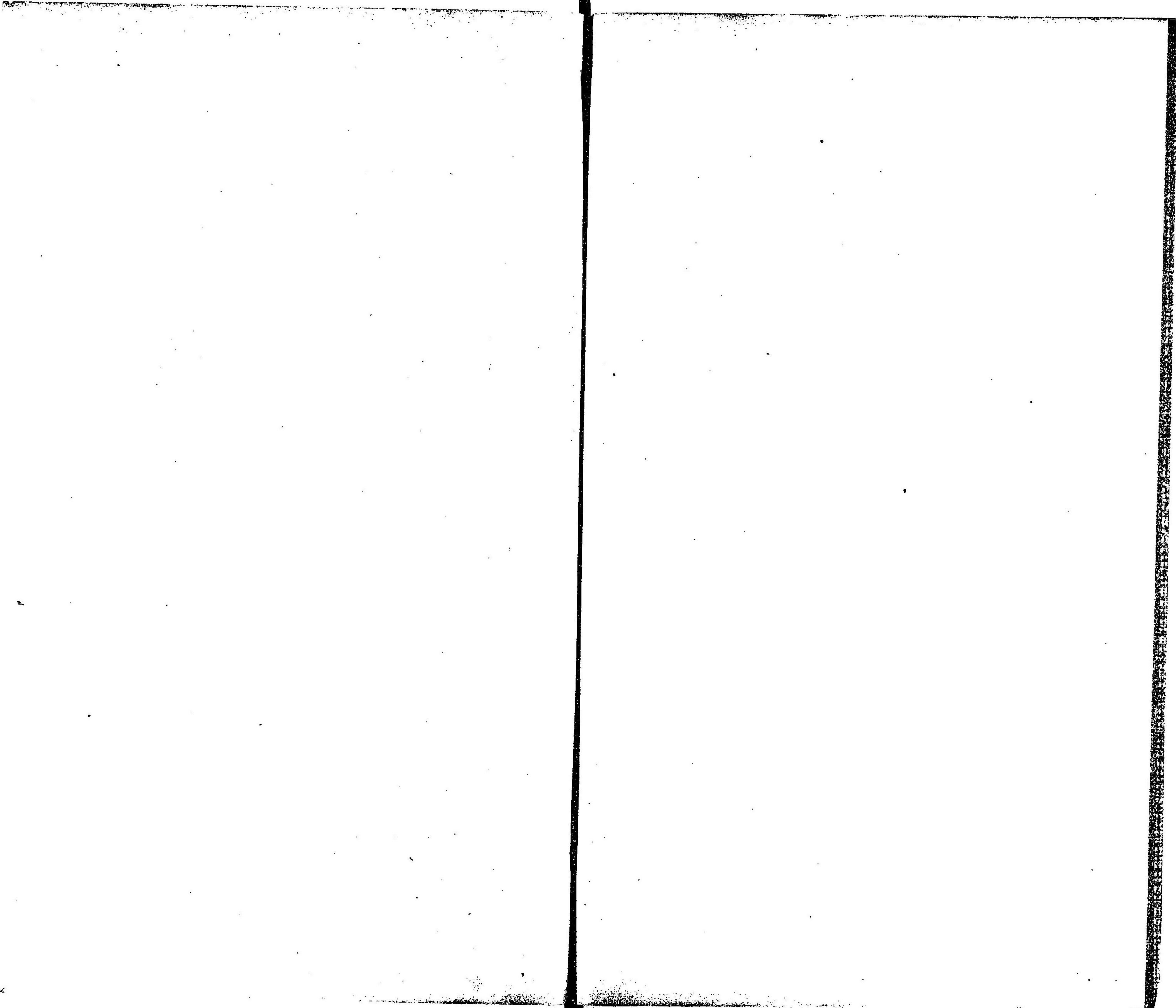
特44

86



265

109



法
中
專
藝
志
緒

博
覽

明治
43. 6. 27
丙寅

己酉初夏

柳江題



川中島

露庵作

天文二十三年秋八月

越後の國春日山の城主

上杉入道謙信は

八千餘騎を引率

川中島に出陣あり

其時謙信申さるに

加賀越前の奴軍は

我父上の仇なれば

之を屠りて其まゝに

旗を都に押立て、

覇を中原に立てんとは

豫ての頼ひなりしをど

彼の村上亦餘義なき頼み

武士の面目もだし兼ね

心ならずも信玄と

互ひに鏖みがきつ、

人生朝露の身を以て

四郡の土地を争ふは

いと惜き次第なり

されば此度の合戦には

敵の旗本所り崩し

一騎打ちして兎も角也

有無の勝負を決せんと

揉みに揉んでそ進まる、

隊伍整々旗鼓堂々

威风四方を拂ひたる

其武者押しの勇い

猛虎深山を行く所

目に狐狸の跳るを許さず

獅子月明に吼るとき

百獸腦破裂すとかや

はや東雲の雲の間を

洩る旭の影さして

四方の川霧川風に

散り行く跡を見渡せば

旗指物を押立て、

真黒々の圓陣は

必死を期せし越後勢

進むが如く退く如く

廻り廻れる馳引は

是れ謙信が極意なる

車搦りの軍法ぞ

すは油断すな破られな

我旗本を固めよと

罵り噪ぐ武田勢

二萬と聞けし大軍も

色めき立って見はにけり

浮足立ちし兵なれば

もり返かへさへも難なん義ぎ我がなり

此この犀さい川めはの彼あ岸なたにて

一ひと先まツ勢せいを揃そろへんと

天あつ晴げと武ぶ功かうの信しん玄げんが

川かは岸きし近ちかく寄より〜頃ころ

遥はるかに見みゆる武む者しや一いつ騎き

青あおの駿しゆん馬めに黄きの羽は織たり

白しろキ頭づ巾きんをかぶりつ

此こなた方たを自みづか掛がけ馳はせ来くるは

敵てきか味み方かたか何なに者ものと

訝いぶかり合あへる一いつ刹せつ那な

馬うまは疾はや風かぜか電とんか

防ふせぐ兵へい士しを斫きり立たて蹴ゆた立た

殺ころ到たうしたる有あり様さまは

只ただ獅子しし王わうが暴あれ出いでて

群むらる羊やうを打うつ如ごとく

面おもてを向むけん人ひともな〜

勢せいひこんだる謙けん信しんは

早はや眼かん前ぜんに迫せまれども

老ろう功かう無む雙さうの信しん玄げんは

稻葉の末に吹く風の

そよとも動かぬ大磐石

池の真菰やあやめ草

何れを具と分けかぬる

目一姿の武者七人

落著き拂つて居たりけり

氣早の謙信之を見て

武者振り見事や武田殿

越後鍛への拳の牙に

いざ參るぞと大音聲

三尺二寸の長光を

大上段にふりかぶり

鶯地にぞ研りかゝる

陽炎稻妻摩利支天

さしは鋭き太刀風を

軍扇上げて受け留る

受け一軍扇研り折り

畳みかけたる二の太刀は

左の肩先はつゝと研る

續いて擧げ一三の太刀

かきにかつて睨み下げ

獅子吼の聲も凄じく

什麼か是れ作麼生

烘爐上一片の雪

答へに毛筋の隙あらば

八幡座より空竹割

ゆめ許せどと問ひ掛けたり

聲に應じて嚴かに

根太き聲は響きけり

劍光裏に赤身を安す

答へ一人の唇は

かすかに笑みを含み

心憎くや思ひけん

莞爾と笑つて詞なく

駒引返一匹一騎

北を指してぞ走りけり

来るに止むる者もなく

去るにも追はる人もなく

千軍萬馬の其中を

縦横自在に馳け廻る

傍若無人の振舞ひに

敵も味方も目を見張り

あれよ〜と打目守り

手に汗握るばかりなり

鞭聲肅々夜渡河

曉見千兵擁大牙

遺恨十年磨一劍

流星光底逸長蛇

遺恨十年磨きにー

劔の下に大敵を

討ちぬらせど後の世に

武道の花とたへられ

千隈の川の氷長く

いと芳ばしき侠骨の

譽れを流し給ひけり

明治四十三年六月十日印刷
全 四十二年六月二十五日發行

編發行兼
編輯人

大阪市東區和泉町二丁目一番地
有 村 彌 四 郎

印刷人

大阪市東區和泉町二丁目一番地
藤 井 護 三 郎
電話東四五五九番

發行所兼
印刷所

大阪市東區和泉町二丁目一番地
藤 井 改 進 堂
長電話東二七〇番

265

109

